

【疑問文練習ワーク I 《いつ・どこ・だれ・なに編》の組立て】

問題用紙の冒頭に提示されている出来事（*課題・問題リスト参照）に対する質問（文）を作るワークです。出来事は25あり、課題 I ~ IVの各25問に対応して、繰り返し出題されます。

出来事例(問題1) →

きのう、えきて、お父さんが かさを、忘れた



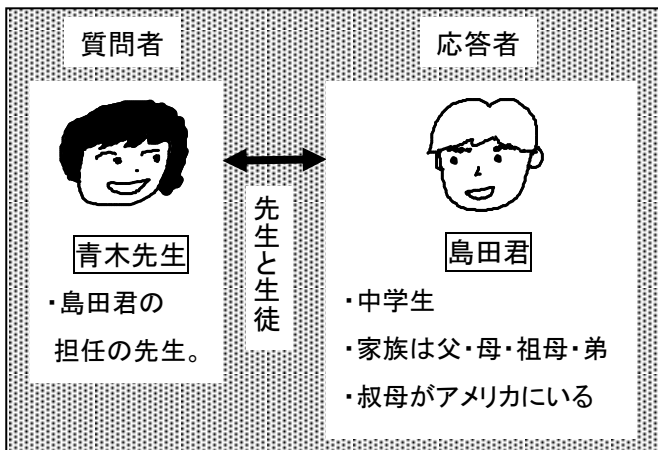
※出来事は、会話の応答者の経験や予定、もしくは伝聞した事柄が、一文で表現されています。

●会話の待遇表現と登場人物について

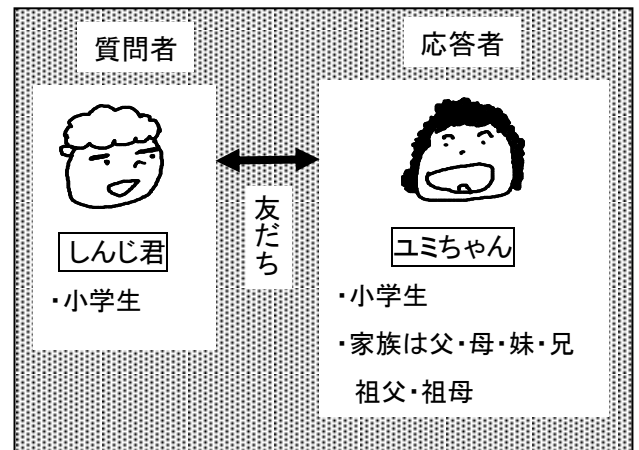
※待遇表現:話し手が人間関係や場面などを配慮して用いる表現。

- ・課題 I ~ IVの各25問は、奇数番が丁寧体(～ですか?/～です)、偶数番が普通体(～の?/～よ)でのやりとりになっています。丁寧体・普通体での疑問文の違いに触れる目的があります。
- ・丁寧体での会話場面では、「青木先生」と「島田君」、普通体での会話場面では「しんじ君」と「ユミちゃん」が、それぞれ質問者・応答者として登場します。問題には書かれていませんが、それぞれ以下のような人物および間柄の設定になっています。

《奇数番：丁寧体》



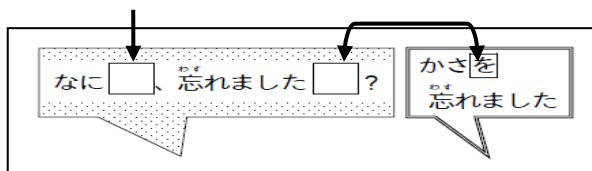
《偶数番：普通体》



●課題 I ~ IVの構成と組み立て (*「ワークの使い方」参照のこと)

- ・課題 I で疑問詞の選択、II で疑問文中の助詞の補充を行います。解答に際しては、応答の文の“助詞”を手がかりにすることができます。
- ・課題 III で、単語の並び換えによる疑問文の作成を行い、最後の課題 IV で、疑問文の自力作成に取り組みます。また、課題 III、IV については、4つの質問(疑問文)のうち1つが、最初に解答例として示されています。作成に際しては、この解答例を手がかりにすることができます。
- ・課題 I ~ IVとも、^{しかく}□囲みや、アンダーラインなどによって、応答の文の構造と、質問の疑問文の構造の対応づけがなされています。また各課題で、疑問文作成のために注目してほしい応答部分を、網掛けなどによって強調しています。

例① II. 助詞穴埋め課題では、応答・質問とも、助詞部分が□で囲まれている。



例② I. 疑問詞選択課題では、疑問詞に対応する応答の名詞部分は網掛け、疑問詞に付いて、解答の手がかりとなる助詞部分には、アンダーラインが引かれている。

